

# 東アジアの政治的変動

(2011年6月)

column4

北陸大学未来創造学部講師

福山悠介

「我々は国民の奉仕者であり、主人ではない。政策に不備があったのであれば謝罪する。」

2011年5月2日、シンガポールの首相、リー・シェンロンが与党、人民行動党（PAP）の集会で、こう演説した。5月7日に控えた総選挙での「逆風」を感じての言葉だったのだろう。

選挙の結果は与党の「敗北」であった。定数87のうち、無投票当選の5議席を除く82議席を巡って行われた今回の選挙で、与党PAPは建国以来、初めて集団選挙区で敗北した。史上最多の6議席を失い、外相と首相府相の現職閣僚が落選することとなった。得票率も史上最低の60.1%に止まり、リー・クアンユー顧問相（初代首相）とゴー・チョクトン上級相（二代目首相）が責任を取って閣僚を引退することを発表した。もちろん、全87議席のうち、81議席をPAPが獲得している以上、PAPの勝利と見ることもできる。

1965年の建国以来、シンガポールはPAPというヘゲモニー政党によって統治されてきた。選挙は行われるが与党有利の選挙制度であり、さほど大きくは問題視されないものの野党や与党批判者への弾圧も行われてきた。リー・クアンユーが31年、ゴー・チョクトンが14年首相を務め、現在のリー・シェンロンで3人目の首相であり、またリー・シェンロンはリー・クアンユーの長男であることからその独裁性が伺えるだろう。

それでも国民から一定の支持があるのは、PAPが牽引した「シンガポールの繁栄」による。2011年11月現在、シンガポールはアジア諸国で最も高い1人当たりGDPであり、日本を既に抜いている。シンガポールは典型的な「開発独裁国家」である。

他方、アジアの開発独裁国家のほとんどは民主化を余儀なくされた。韓国や台湾が典型的な例であるが、与野党交代という意味では55年体制下の日本もそうと言えるだろう。

「何が正しいかを決めるのはわれわれであり、国民がどう思うか気にする必要はない」

かつてリー・クアンユーはこう述べたが、冒頭のリー・シェンロンのコメントは、シンガポールの独裁の終わりの始まりを告げるものなのかもしれない。

なお、2011年から2012年にかけて、東アジアは選挙の年、政治の変化の年になる。

2011年1月には既にミャンマーで1962年のクーデター以来の議会が招集され、2月には民政移管の完了が発表された。5月22日にはベトナムで国会議員選挙が実施された。この選挙は中国と領有権を争うスプラトリー（南沙）諸島でも行うため、中国から非難声明が出された。7月3日にはタイで総選挙が実施され、現在のタイ情勢混迷のきっかけとなったタクシン元首相の実妹が野党「タイ貢献党」から出馬し、選挙に勝利した。タクシン元首相は有罪判決を受けているが、その恩赦をめぐって混乱も否定できない。

2012年1月には台湾（中華民国）で総統選挙がある。2012年は中華民国成立から100年という節目でもあるため、改めて中国との関係について葛藤が強まるだろう。中国も2012年に第18回共産党大会が開催され、胡錦濤から次世代へ権力が委譲される予定である。東ティモールでも2012年に独立後2度目の大統領選挙、国民議会選挙が実施される予定であり、また2012年はASEAN加盟の目標の年でもある。北朝鮮にとって2012年は金日成生誕100周年であり、「強盛大国の大門を開く」と位置づける重要な一年になる。年末には韓国大統領選が実施され、経済、そして北朝鮮問題が主要な争点となる。

そしてこの地域に大きく影響するアメリカでも大統領選挙、上院下院での選挙が行われる。2011年9月11日、911テロ10周年を迎えるアメリカは、ウサマ・ビンラディンの殺害に成功し、そして2011年7月からアフガニスタンから撤収を開始し、12月にはイラクからの撤収が完了する予定である。新たな「テロとの戦争」も否定できない。

この1年で実施される選挙は単純な「中間選挙」や儀式的な選挙ではなく、大きな政治変動を予想させる選挙である。東アジアの国際関係も激しく変動することになるだろう。